次号予告

BOOKMARK 16
2020 SUMMER

「stranger than fiction?」

［ブックマーク］
2019年 冬号
Take free

BOOKMARK

FREE BOOKLET［ブックマーク］

BOOKMARK

中学生の頃から短編が好きだった。ブラッドベリ、アシモフ、アイリッシュ、ダール、デュ・モーリアといった読みやすくて面白い SF、ミステリ作家から始まって、マンディアルグ、カルヴィーノ、ブッツァーティ、残雪、金仁淑など、ちょっと癖のある作家のものまで、とにかく短編が好きだ。1987年から朝日新聞で連載していた「ヤングアダルト招待席」という若者むけの本の書評コーナーで60冊以上の本を紹介した。そのなかで特に印象に残っている本のうちの１冊がタニス・リーの幻想短編集『タマスターラー』だ。そういえば妹も短編が大好きで、よくあれがいい、これがいいなどと言い合った（たいがい、意見は一致するのだが、クリスティに関しては相容れなかった）。その妹が愛してやまなかった短編、マルケスの「美しい水死人」も忘れられない。流れてきた巨人の死体を村人たちがきれいにして、服を仕立てて着せて、勝手に名前をつけて、また海に流してやる……という不思議な話なのだが、読み終えて、全身の力がふっと抜けるような快さがある。何度読んだだろう。今回、ふと気になってネットで調べていたら、チェ・ゲバラへのオマージュ的な作品だという解説があった。ほう、これはおもしろいな、妹に教えてやりたいと思ったけど、考えてみたら、18年前に死んでいた。

（金原瑞人）

Special Guest

宮内悠介

Miyauchi Yusuke

宮内悠介

二〇一七年の十一月、『遠い他国でひょんと死ぬるや』という長編の取材のため三週間フィリピンを訪ねた。目的は、ルソン島で戦死したとされる詩人、竹内浩三の足跡をたどること。戦後七十年余りを経て、記憶の語り部も減ってきている。ならば、自分の目と足で、いくばくかでも過去の記憶をたぐりよせられないかと思ったのだった。まして、ＳＮＳでは膨大な「現在」が押し寄せ、個々人は分断されている。そんななか、「歴史」を取り戻すことはできないか？　それが今回、自分に課したテーマだった。

ところが、当時のフィリピン情勢はというと、おりしもＩＳが南部の街を占拠し、政府軍がそれを奪還したばかり。過去ばかりを追って、いまそこで起きたばかりの戦争に目を向けないというのも、何か不誠実な感じがする。そこでぼくは南部のミンダナオ島に飛び、ＩＳが占拠して住民を人間の盾にしていたというマラウィ・イスラム市を目指すことにした。

誘拐のリスクを減らすため、まずは近くの街に宿を取り、周囲の誰にも目的地を告げず、流しの車を拾ってマラウィに入った。行く道、帰る家を失った避難民のキャンプが目についた。イスラム建築風の大きな門をくぐり、街の中心を目指す。商店のシャッターはことごとく閉まっており、一つひとつに、英語でＣＬＥＡＲとスプレー書きされている。政府軍が確認し、ＩＳがいなかったという印だ。学校やバス停の落書きを見た。落書きは、どの国とも同じようなものだ。

何がきっかけであったのか、突然、運転手が怯え出して「もう戻ろう」と言い出した。市内をもっと広く回る約束であったが、運転手の勘を信じて戻ることにした。

今年の二月、住民投票を経てミンダナオ島にバンサモロ暫定自治政府が発足した。一部の人々にとって長年の目標であった、イスラムによる自治政府だ。いまは、和平プロセスが進行中と聞く。マラウィの復興と自治政府の和平を願う。

『遠い他国でひょんと死ぬるや』
宮内悠介 著
（祥伝社）
¥1,700＋税

15_01

[吹竹節的鬼]
李 昂

『海峡を渡る幽霊 李昂短篇集』
李 昂
藤井省三 訳
（白水社）
¥2,200＋税

台湾フェミニズム作家の李昂（リー・アン、1952-）さんに初めてお会いしたのは1992年４月のこと、それはこの島の民衆の粘り強い闘いにより実現した民主化と高度経済成長、そして独自の文学映画に、世界が注目し始めていた時期でした。彼女の故郷の古い港町についてお訊ねしたところ、「鹿港（ルーカン）では 昔、どの通りでもお化けが出たもの……」とお話しになった言葉が忘れられません。本書には、初期の抒情性に溢れた作品と実験的心理小説、中期を代表する二・二八事件（二万人以上の台湾人虐殺）をめぐる政治とセックスの物語、そして最近作からは台湾の歴史を描く幽霊物語および政治的グルメ小説を収めています。

全篇を貫くものが中国語で“鬼（クェイ）”と呼ばれるお化けです。“鬼”たちは近代化により淘汰された伝統、政治やジェンダーの独裁により殺害された生命、経済成長により喪失された寛容などの貴さを忘れてはならない、と私たちに呼びかけているかのようです。

（藤井省三）

15_02

[*Sightseeing*]
Rattawut Lapcharoensap

『観光』
ラッタウット・ラープチャルーンサップ
古屋美登里 訳
（早川書房）
¥800＋税

本書には、タイで生まれアメリカに留学した若い作家（当時25歳）が英語で書いた７つの短篇が収められています。「ガイジン」はイギリスの文芸誌「GRANTA」に掲載されるやたちまち絶賛され、鮮烈なデビューを飾りました。アメリカ人の父とタイ人の母のあいだに生まれた「ぼく」は、クリント・イーストウッドと名付けた小さな豚を大切にしています。アメリカに帰ったきり消息もつかめない父親からのプレゼントだからです。その日常と寂しさが丁寧に描かれていきます。他の６作品も、どこにでもあるようでいてとても珍しい風景を見せてくれます。飾らない文章で書かれているのに、そこに流れる空気や匂いや音が、そして人々の瑞々しい感情が、不思議なくらい現実感を伴って伝わってきます。得がたい才能の作家です。

日本で刊行されてから12年が経ちましたが、いまでも多くの方に手に取っていただいていて、訳者としてはなんとも嬉しいことです。刊行後、幸いなことに、作家や編集者の方々から称賛されました。なかでも故・河野多惠子さんが「この本のどの作品もすぐに芥川賞を獲れますよ」とおっしゃった、と担当の編集の方から教えていただいたことは、とてもいい思い出です。

（古屋美登里）

15_03

[*The Thing Around Your Neck*]
Chimamanda Ngozi Adichie

『なにかが首のまわりに』
チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ
くぼたのぞみ 訳
（河出書房新社）
¥1,150＋税

抽選でヴィザに当たって、ラゴスからやってきた女の子が経験する「ギブ・アンド・テイク」のアメリカ。いろいろ教えてくれたおじさんからセクハラを受けて家を出た彼女は、長距離バスでたどり着いた街のレストランで働きはじめる。故郷には送金しても手紙は書かない。書けないのだ。夜になるといつも首のまわりになにかが巻きついてくる。でも、エキストラ・ヴァージン・オイル色の目をした白人の男の子と仲良くなって、それが消えはじめた。初めてラゴスに手紙を書くと、父親が死んだという知らせがとどく。そのとき自分はなにをしていたのかと身をまるめて泣く主人公。

ラゴスに帰る空港まで送ってきた男の子を、しっかりハグして別れを告げる彼女は……。

理解しようとしながら、大きなギャップによってすれちがう恋人たち。大きく異なる世界で生まれ育ったから？　白人と黒人のカップルだから？　そんな切なさがナイジェリア生まれの女の子の目から切なく細やかに描き出される。これまで見えなかった視界がクリアに開けてくる12の短編が入っています。

（くぼたのぞみ）

15_04

[*Interpreter of Maladies*]
Jhumpa Lahiri

『停電の夜に』
ジュンパ・ラヒリ
小川高義 訳
（新潮社）
¥1,900＋税

翻訳からもう20年になるのだが、いまなお初版の体裁でも文庫本としても読まれているという、訳者にはありがたい一冊である。ラヒリのデビュー作であり、この時点での完成形でもあった。旧世界から新天地へ移動して、ときに往復することもあって、わからないことをわかるようにしなければ生きていけない移民にとって、わかろうとする開拓（＝翻訳）は死活問題になる。移民文学は一種の「翻訳」文学でもある。この短篇集にあっては、インドとアメリカの風味が、ほぼ半々のブレンドになっていて、「何らかの意味でアメリカとインドの狭間に身を置いた人々の、いつもの暮らしの中に生じた悲劇や喜劇を、じっくり味わわせてくれる」（「訳者あとがき」より）。だが素材はあくまで素材である。いかに料理してみせるかというシェフの腕前が大事なのだ。ラヒリには裏切られたことがない。彼女が本作から出発した英語作家としての開拓は、その規模を拡大しつつ、長篇『低地』に達して一段落した。いまはイタリア語で新たな創作をしている。ラヒリは別の言語を開拓地として生きる人だ。

（小川高義）

15_05

[몬순]
편혜영

『モンスーン』
ピョン・ヘヨン
姜 信子 訳
（白水社）
¥2,000＋税

不穏です。９つの短編の中に、９つの日常から洩れでる、９つのひそかな叫びがこだましているんです。作家曰く、それはムンクの幻想的な叫びではなく、フランシス・ベーコンの描く孤独な叫び。実際、「顔のゆがんだ男が椅子に座って絶叫する絵」が、どうしようもなく人生の不条理を知ってゆく少年たちの物語の中に飾られているんです。ピョン・ヘヨンという作家は実に耳がいい。目も利く、鼻も利きます。日々同じことの反復でしかないような日常、だからこその不条理に生き惑う者たち、そのひそかな叫びに耳をそばだて、ひとりひとりの肌触り、湿ったにおい、喜怒哀楽が絡まりあう心の襞にまで想像力をぶすりと喰い込ませてくる。この想像力に既に私の生もあなたの生も捕えられているかのようで、９編の物語はそれぞれに私たち自身のことのようで、そうなると本を閉じたからといって日常も不条理も閉じられるわけもなく、読み終えた途端に私たちは行方の知れぬ闇に放り出される。これはじわじわ恐ろしいです。きっとあなたはひそかに叫びます。実に不穏な私たちの物語。

（姜 信子）

15_06

[*From These Ashes:*
The Complete Short SF of Fredric Brown]
Fredric Brown

『フレドリック・ブラウン SF 短編全集 1
星ねずみ』
フレドリック・ブラウン
安原和見 訳
（東京創元社）
¥3,500＋税

フレドリック・ブラウンは子供のころに夢中で読んだし、筋を憶えている作品も多い。しかしそのわりに、初めて読んだのがどの作品だったのかいくら考えても思い出せない――ある年代以上のＳＦファンには、そういう人が多いのではないだろうか。ブラウン作品はいつのまにか自然にそこにあって、気がついたときにはＳＦ読みの常識、というよりほとんど血肉になってしまっていたように思う。

そのブラウンのＳＦ短編全集を訳させてもらうことになり、ン十年ぶりに読み返してみて面白さに正直びっくりした。胸をどきどきさせて読んだ子供のころを思い出し、懐かしさが面白さに「ゲタを履かせている」可能性もなくはない。しかし、語り口の巧みさ、さりげなく張られた伏線の周到さ、そしてなによりあっと驚くオチの鮮やかさと、ブラウン作品には古くなりようのない要素がぎっしり詰まっている。往年のＳＦファンのみならず、若い読者にも「ブラウンとかいう面白い作家がいる」と知ってもらえたらこんなにうれしいことはない。翻訳者冥利に尽きるとはまさにこのことである。

（安原和見）

15_07

[*Khaneh'i dar Aseman*]

Goli Taraghi ほか

『天空の家 イラン女性作家選』

ゴリー・タラッキー ほか

藤元優子 編訳

（段々社）

¥2,000＋税

『天空の家』は、1980年代以降に書かれたイラン女性作家７人による短編のアンソロジーである。日本でイランというと、イスラーム教の原理主義国で怖い、という負のイメージが染みついているが、2500年以上の歴史と豊かな文化を持つこの多民族多言語多宗教国家の実像を女性の姿を通して伝えたい――そんな気持ちで、様々な出自と作風の作家たちの作品を選んだ。

1979年のイスラーム革命後、政治的･経済的に世界から孤立しがちなイランでは、思想信条の自由や経済的安定を求めて国外に出る人も多い。老婦人が祖国から切り離されて彷徨う「天空の家」にはそんな背景があるし、イラン社会の不条理を象徴的に描いた「アトラス」は、本国では検閲に阻まれ、この邦訳が世界初の紹介となった。ただ、そんな事情は別にしても、「染み」や「見渡す限り」の当意即妙のやり取りにニヤリとしたり、「アニース」の村娘のしぶとい生き様に呆れたりしながら、今を生きるイラン女性のエネルギーと知性の煌めきが実感できること請け合いの一冊である。

（藤元優子）

15_08

[*A Thousand Years of Good Prayers*]

Yiyun Li

『千年の祈り』

イーユン・リー

篠森ゆりこ 訳

（新潮社）

¥2,000＋税

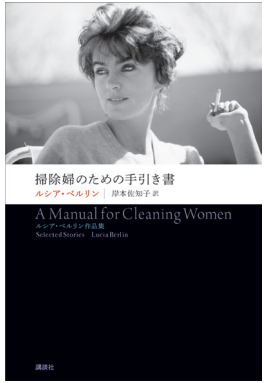
中国出身の著者が英語で書いた短編集。ここに描かれる世界は何百年という時を超え、二大陸を舞台にするスケールの大きさを持つ。たとえば「不滅」という短編は、ある地域の共同体そのものを語り手とし、宦官がいた時代から現代までをほんの三十ページ弱で駆け抜ける。それでいてどの短編も、登場人物の孤独や愛や葛藤といった繊細な心のありようを丁寧にすくいとっている。幼い少年への愛情を宝物のように胸にしまう年輩の女性。障がいのある娘を隠しながら介護する夫婦。秘密を語らず娘の反発を受ける一方、言葉が通じない外国人と心を通わせる父親。市井の人々の暮らしを見つめる著者のまなざしはあたたかい。本書のあちこちに散りばめられた中国の格言やことわざも、味わい深い。

著者は北京生まれで、大学卒業後にアメリカに留学し、免疫学の博士課程の途中で方向転換して英語で小説を書くようになった。デビュー作である本書で数々の文学賞に輝き、さらに次の短編集『黄金の少年、エメラルドの少女』で「中国のチェーホフ」と呼ばれるようになった。

（篠森ゆりこ）

15_09

[*A Manual for Cleaning Women: Selected Stories*]
Lucia Berlin



『掃除婦のための手引き書
ルシア・ベルリン作品集』
ルシア・ベルリン
岸本佐知子 訳
（講談社）
¥2,200＋税

ルシア・ベルリンは六十八年の生涯に七十六の短編を書いた。短編しか書かなかった。書きはじめたのは二十代のなかばで、四人の息子を抱えたシングルマザーで、掃除婦などの仕事をしながらアルコール依存症にも苦しんでいた。もしかしたら、長いものを腰を落ちつけて書く時間はなかったのかもしれない。深夜や早朝、仕事や家事育児の合間をぬって、キッチンのテーブルに座って書いていたのかもしれない、想像だけれど。

彼女の作品を最初に読んだのは十五年くらい前だった。読んだ瞬間に魅了され、いらいずっと魅了されつづけている。彼女の良さは、たとえばパキッと放り出すような文章だ。ある作家の方は「手離れのいい」文章と呼んだ。べつの作家は「速い」と表現した。彼女の書くものは「汚くて美しい」と言う人もいた。私は、みんなのそういう言葉を集めている。書き手たちの中をくぐって語られる言葉、それもまたルシア・ベルリンだと感じる。彼女の小説には、物書きの奥深い部分を揺さぶらずにおかない、不思議な魔力があるようだ。

（岸本佐知子）

15_10

[沈香屑 第一爐香 /
五四遺事 羅文濤三美團圓 /
同學少年都不賤]
張 愛玲

『中国が愛を知ったころ 張愛玲短篇選』
張 愛玲
濱田麻矢 訳
（岩波書店）
¥2,400＋税

「薇龍はその日、青緑色の薄いシルクの旗袍を着ていたのですが、彼の緑色の目に見つめられると、自分の腕が沸き立った牛乳のように、青いポットから流れてしまうのを感じました。止めようにも止められず、自分がすべてこぼれてしまうかのようです」。

舞台は太平洋戦争勃発前夜の香港。上海の平凡な少女薇龍は、富豪の妾だった伯母の家に身を寄せることになった。金と欲が渦巻く社交界でなんとか正気を保ち続けようとする彼女は、道楽者のジョージ喬と出会った瞬間、どうしようもない恋に堕ちる。古典小説を模した古めかしい語り口と精緻な比喩が、一途な愛を軸にして生活を立て直そうともがく薇龍の悲劇を冷徹に描き出してゆく。

没後20年を過ぎてなお中国語世界で深く愛されている作家、張愛玲の鮮烈なデビュー作「沈香屑　第一炉香」のほか、近代中国にもたらされた「愛」という難事に、傷つきながらも真正面から向かい合う女たちを描く短篇二篇を収録。いずれも初の邦訳である。

（濱田麻矢）

15 _ 11

Franz Kafka

『絶望名人カフカの人生論』

フランツ・カフカ
頭木弘樹 編訳
（新潮社）
¥520＋税

中学生のとき、夏休みの読書感想文のために、いちばん薄い文庫本を選んだら、カフカの『変身』だった。その『変身』を思い出したのは、二十歳で突然、難病になったとき。ある朝、ベッドの中で虫になって、部屋から出られなくなって、家族に面倒を見てもらうしかなくなった主人公。久しぶりに読み返したそれは、難解な小説どころか、自分にとってはまさにドキュメンタリーのようだった。

カフカの日記や手紙まで読むようになった。こういう言葉があった。「将来にむかって歩くことは、ぼくにはできません。将来にむかってつまずくこと、これはできます。いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです」病院のベッドで倒れたまま読んだ。笑って泣いた。

13年の闘病生活の間、自分自身のために、カフカの言葉を訳していった。手術して社会復帰できたとき、本にしようと思った。昔の自分のような人の手に届けたかった。カフカの「ぼくの本が、あなたの親愛なる手にあることは、ぼくにとってとても幸福なことです」という言葉と共に。

（頭木弘樹）

15 _ 12

[*Le Paradis des chats*]
Émile Zola

『ゾラ ショートセレクション 猫の楽園』

エミール・ゾラ
平岡 敦 訳
（理論社）
¥1,300＋税

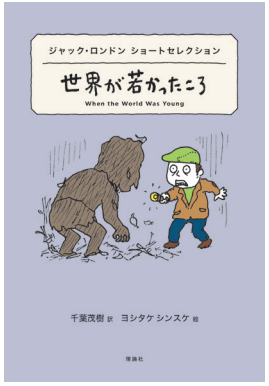
ゾラは長編を得意とした作家だけに、短編作品はちょっと肩の力を抜いて、いかにも楽しんで書いている感じが伝わってくる。とはいえそこは大作家のこと、ショートショートほどの掌編にも案外深いテーマがこめられているから侮れない。

例えば表題作の「猫の楽園」は、気ままな野良猫の暮らしにあこがれて家を飛び出したデブの飼い猫が現実の厳しさを思い知らされる顛末をユーモラスに語るなかで、物質的な安楽か精神の自由かという問題をさりげなく提起しているし、怪しげな広告の謳い文句にのせられて次々に粗悪品を買いこんでいく男の悲劇「広告の犠牲者」には、通販全盛の現代社会にも通じる痛烈な風刺が効いている。

ほかにも《早すぎた埋葬》ものの「オリヴィエ・ベカイユの死」や田舎の荒れ屋敷にまつわる因縁話「アンジェリーヌ」のような怪奇風の話、戦いに明け暮れる人間たちの罪深さを聖書の場面に託して描いた幻想的な短編「血」などなど、《自然主義作家》ゾラの多様な側面を知っていただける一冊です。

（平岡 敦）

15_13



[*When the World Was Young*]
Jack London

『ジャック・ロンドン ショートセレクション
世界が若かったころ』
ジャック・ロンドン
千葉茂樹 訳
（理論社）
¥1,300＋税

振り返れば、これまでに訳してきた短編集は、どれもこれも畏れ多いような作家たちのものでした。O・ヘンリー（全８巻！）を皮切りに、サキ、ポー、ドイルのホームズ。本書のジャック・ロンドンも含め、いずれもあらかじめ収録作が決まっているわけではなく、膨大な作品群を読みあさり、そのなかから選ぶという編者の役割も担っています。選ぶ際には、先行する短編集とはなるべく重ならないようにしたいけど、代表作を落とすわけにいかない。さらにはその作家のいろいろな面を知ってもらいたい。できればサプライズも、などなど、全体の文章量に制限があるなか、悩みはつきません。

本書でも、『野性の呼び声』や『白い牙』のイメージだけではないロンドンを、という思いで編んだつもりです。例えば表題作はＳＦ!?　ただ、波乱万丈の人生にふさわしく、おそろしいほどの多面性を持つロンドンですので、紹介できたのはごく一部にすぎないのはちょっと心残り。本書でロンドンの面白さにふれ、ロンドン作品の深い森に足を踏み入れるきっかけにしていただければ幸いです。

（千葉茂樹）

15_14

[*Second-Best*]
D. H. Lawrence

『ロレンス ショートセレクション
二番がいちばん』
D・H・ロレンス
代田亜香子 訳
（理論社）
¥1,300＋税

えっ、えっ、なんでいきなりそういう展開になるの？　と頭のなかがクエスチョンマークでいっぱいになり、だれにも感情移入できないかもと思って読んでいるうちに、気づいたら共感ポイントがわんさか、という不思議な作品です。

一世紀以上も前に書かれているのに、決して色あせないユーモアとバカらしさと切なさとやさしさがいっぱいです。

魅力的な女の人と、知的な男の子と、年をとるにつれて知的ではなくなってしまった大人の男性がバラエティ豊かにたくさんでてくるので、きっとお気に入りの登場人物が見つかるはずです。

訳者が好きなのは、「男なんて大きな犬くらいにしか思っていない」妹です。

ある一線を越えると、人間って何するかわからないものですね。

（代田亜香子）

15 _ 15

[*The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives*]

Viet Thanh Nguyen

『ザ・ディスプレイスト
難民作家18人の自分と家族の物語』

ヴィエト・タン・ウェン 編
山田 文 訳
（ポプラ社）
¥1,700＋税

難民と聞くと、どんな人を思い浮かべるでしょうか。わたしたちが手を差しのべてあげなければいけない無力でかわいそうな人？　あるいはわたしたちの社会を脅かす危険なよそ者？　情けをかけるにせよ恐怖を覚えるにせよ、わたしたちの多くは難民のことを間接的にしか知りません。難民自身の声を聞くことはなく、報道などをもとに漠然とした印象を抱いているだけのことがほとんどです。

この本には難民作家18人の声が収められています。世界のさまざまな地域から逃れ、英語圏で高い評価を得ている作家たちの声です。当事者が豊かな声で語る経験が、わたしたちの痛みや居心地の悪さと結びついて、想像力と共感を強くかき立てます。固定観念の枠が揺らぎ、これまでぼんやりとしか見えていなかった「よそ者」が、顔と体温のある一人ひとりの人間として浮かびあがってきます。

その先には、いまとは異なる世界のあり方が見えてくるはずです。作家たちの声が多くの人に届いて、世界がいまよりもやさしい場所になりますように。

（山田 文）

15 _ 16

[*Fragile Things: Short Fictions and Wonders*]

Neil Gaiman

『壊れやすいもの』

ニール・ゲイマン
金原瑞人／野沢佳織 訳
（KADOKAWA）
¥1,320＋税

コミックの原作者としてブレイクし、『ネバーウェア』『アメリカン・ゴッズ』などの長編小説で名をはせ、映画やドラマの脚本・制作も手がけるゲイマンが、８年かけて編んだ短編集。まず、１編目の「翠色の習作」がすごい。シャーロック・ホームズの世界とＨ・Ｐ・ラヴクラフトの世界が見事に融合。ドイルの『緋色の研究』と合わせて読めば、面白さが倍増する。「スーザンの問題」は、作者の『ナルニア国物語』への愛に裏打ちされた、不気味で残酷で切ない物語。映画化された「パーティで女の子に話しかけるには」や「メモリー・レーンの燧石」「閉店時間」は、作者の素顔が垣間見える作品で興味深い。さらに、日常的な場面から不思議な世界に迷いこむ「ミス・フィンチ失踪事件の真相」「サンバード」、冷徹無情な語り口になぜかひかれる「形見と宝」、哀愁漂うＳＦ小説「ゴリアテ」等々、魅力的な作品ばかり。随所にちりばめられた詩――「髪と鍵」「円盤がきた日」など――も味わい深い。

巻末の、作者による作品ごとの解説と、山尾悠子さんによる解説も必読です。

（野沢佳織）

Pick Up Creator

村田恵理
Murata Eri
erimurata.myportfolio.com

村田恵理 個展
「ムラタ張り子展」
2019年11月23日（土）--- 11月30日（土）
*11月27日（水）のみ休業
横浜・藤が丘 / M.O.N.O.SHOP&GALLERY

「魚を持っている招き猫」

BOOKMARK 15
［ブックマーク］ 2019 WINTER

２０１９年 11月 発行
印刷：グラフィック

URL：kanehara.jp/bookmark/
Twitter：@bookmarkFB | Facebook：facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行
金原瑞人（法政大学教授・翻訳家）

「ブックマーク」は翻訳物を紹介する冊子なので、日本の作家の短編集は取り上げなかったのだが、日本物も大好きなのだ。上田秋成、内田百閒、稲垣足穂から、筒井康隆、山尾悠子、宮内悠介（さん）まで。いま創作ゼミで『文士の意地―車谷長吉撰短編小説輯』を読んでいるところ。

編集
三辺律子（英米文学翻訳家）

子どものころは圧倒的に長編派……と思っていたけど、よく考えたら、メアリー・ポピンズ・シリーズや『ジャングル・ブック』、『ロビン・フッドの愉快な冒険』などは好きなエピソードばかり100回以上読んだなーと。そうやって繰り返し読めるのも短編の魅力かも！

イラスト・ブックデザイン
オザワミカ（イラストレーターとかいろいろ）

翻訳物で繰り返し読んでいたのはコナン・ドイルの短編集（ホームズシリーズ）。日本物で忘れられない短編集は小５の時の担任の先生が読んでくれた「筒井康隆全童話」。

協力　宮坂宏美／田中亜希子／中村久里子
special thanks to　酒井謙次／（株）ライブラリー・アド・サービス